

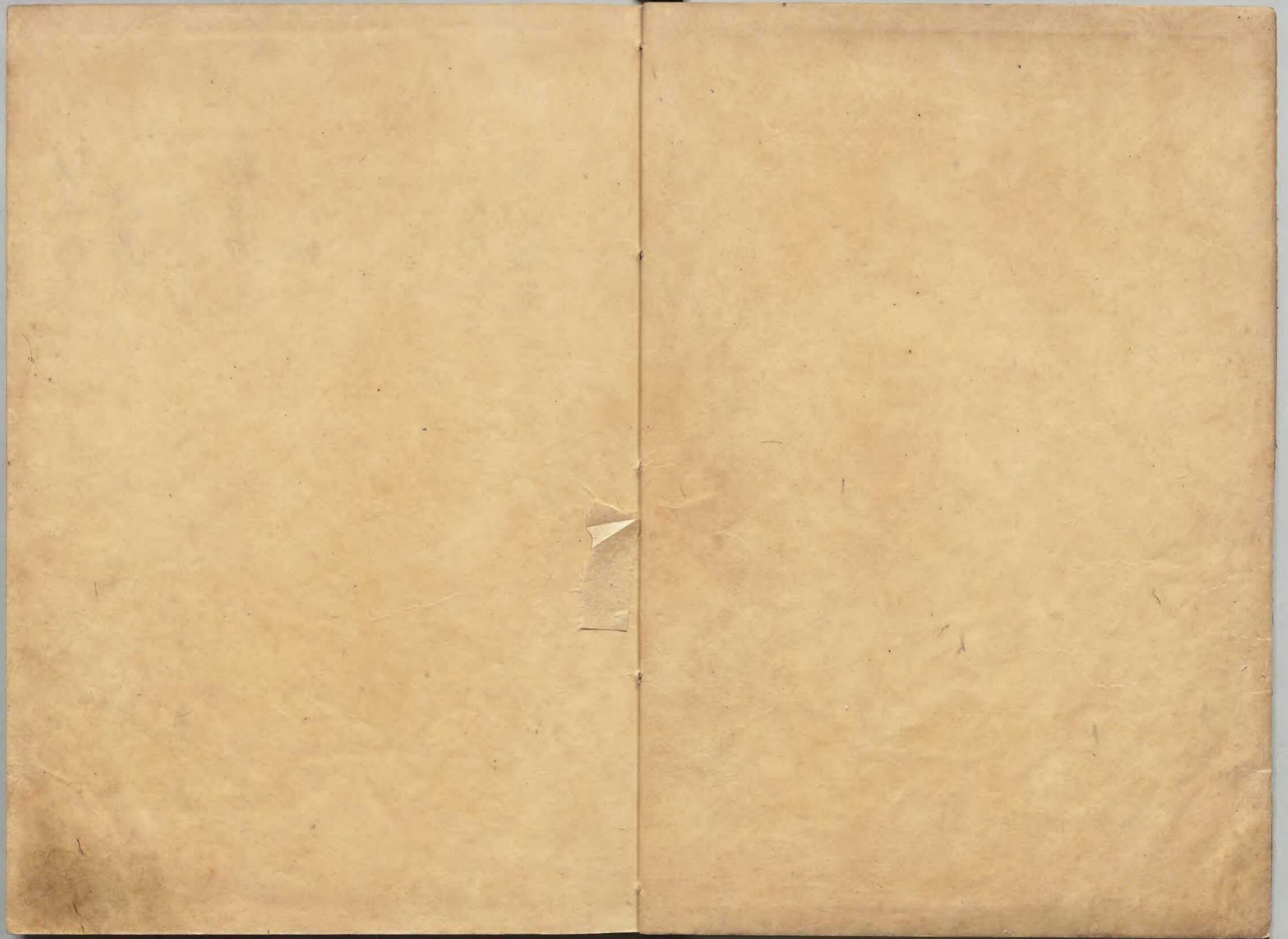
寛永諸家譜

嵯峨源氏 文徳源氏  
二卷之内

161

内閣文庫		
番號	和	20199
冊數	186	(161)
函號	76	1





源氏

渡邊

多門

文源氏

大橋

白山

寛永諸家系圖傳

源氏

渡邊

競が末流なり

競

久門

先祖

の

諱

を

名

是流

三

別

和

回

り

信忠

及

清原

君

り

は

く

淺草文庫

信

まつり忠節とほくは  
天文三年七十二歳少く死す

久松

清康君

廣忠卿

まつり忠節とつり旗本組頭也

なり三河和留郷と領とまほ

大指現りは之とまつり

清

永禄九年長崎におわく病死六十

三歳 法名 成林

新苑 苗書 助 清と法盛とつり

大指現りは之とまつり教度忠節

とつり石川伯耆守と同列也

元龜元年八月廿六日死す歳二十九

先さき

承久やのふゆ

廣忠ひろただ卿きみ

とらひ

大権現おほいけんげんより法しほ之のとらひ

正久ただひさ九年しほくわんねん足利あしかが頭かぶとらひ

正ただ長なが八年はちねん足利あしかが六むとらひ 法名しほな

寺てら名な

勝かつ

河か内うち

大権現おほいけんげんとらひ

白河院しらかわいん殿どの

將軍しやうぐん家けより法しほ之のとらひ

正ただ長なが八年はちねん足利あしかが頭かぶとらひ

正ただ

信のぶ長なが卿きみ

右

孫七郎

寛永十二年三月十五日

將軍家よりききくをきくまうす

同十八年四月冲書院書とつて

女子

永なが

十右衛門

大指現よりけしをきくまうす

元龜二年十二月廿二日三原より

相あつく討死

光みつ

海船

茂しげ

新苑 久居門 山城守

大指現より

台徳院殿より侍りて了りし事  
 姉川合戦の侍を主外志しく戦  
 場より侍り且形々此中使とつ  
 為長十年四月廿六日辰五位下ノ叙  
 山城守ノ伊豆輕守此同京都二  
 条北城番と侍りし事  
 將軍あり侍りて了りし事  
 寛永十五年正月四日江戸より  
 卒と歳八十八

某（イ）

新九郎

大指現より侍りて了りし事  
 三原  
 ありおわく戦ひ死す

某

白鳥

大指現より侍りて了りし事

古瀬院殿よりけりてまうみ  
そ長あ子伏見の城にあり  
おのゝく病死

秋道

天正十一年六月廿三日武別岩  
付の城よりおのゝく本多中務也  
先登りて我ひ死す

志

新荒 監物

美る三州戸田らた妻子女なり

大指現の釣糸よりけりて海よりく酒造

山城守善く子也

古瀬院殿よりけりてまうみ

山崎守と回教度沙陣なり

沙上原の侍をよほむ父ら城を京

却二条の城代なり



善

元和五年冬駿河城番として  
寛永元年忠長郷より戻りて  
りり切かく病死

久松

寛永十三年四月祖父山城守  
とほしく女地を領す

家の級三枕目

新築より後三丈裏鏡とす



某

後鳥羽

本雲守 生國山城  
城川田中ノ居候  
ノ相水彈正  
ノ

た馬助

生國河原

後李叔と号す

しめハ杉江流心ハ強リリけよのら

ちく義昭リけ入東山一系也

城を治(才之内)猫と同居也

元龜四年義昭と信長と身有

と云ひ宇治志守徳ノ城を築く

拒我よといても勝利と得と云く義昭

乃士卒並殿水とこれよりほま

ちく漢松リおわく

大持現リつくとてまらふ

享長四年十月一日ノ死と歳六十二

法名宗徹

長九郎 名長 生國氏流江戸

九歳のとき

右徳院殿より湯乃くそてまつ

享長十九年大坂陣、修を

翌年五月七日大坂波落の村まで

我ひく軍切、

寛永十六年城川一系寺再回中

あ和祖父お書も領地、

と聞、を、は、先、

地を、は、は、祖父の地と

精

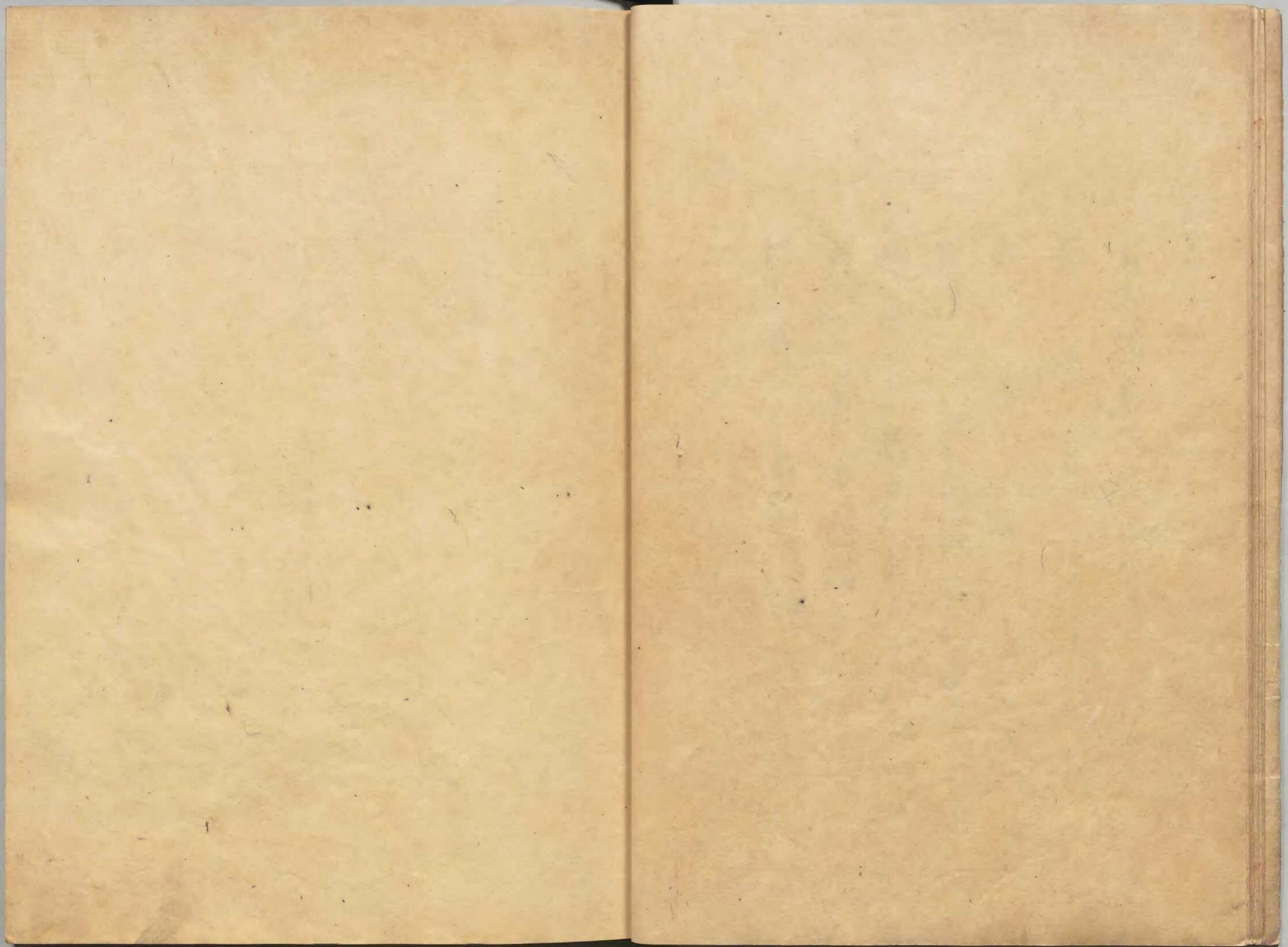
共九郎 生國回前

寛永六年十月朔

將軍家より、

同九月より、

家の級、丸の由、



某

渡邊

孫右馬

生國尾張

久重

のこしげ

孫右馬

宗右馬

生國尾張

織田信長

子修子

享長二年五月廿四日、死年七十  
七歳

久勝 ひさかつ

孫在東

生國河前

信長 のち 信長

享長十一年

東照大権現より信長之をくすくす  
大坂 のち 大坂の陣より信長 のち

元和六年十二月十二日、死年六

久次 ひさつぎ

孫助

生國河

元和六年十歳少く

右徳院殿より信長 のち 信長 のち

同九年

將軍家より信長 のち 信長 のち  
寛永四年より信長 のち 信長 のち



家の紋  
辨

朝あさ

甚右衛門

生國同前

信のぶ

筑後守くごのり

生國伊勢いせ

伊勢の國司いせのくにのつかさど如富にちとみりり法はふ子こ

渡邊わたなべ

伊勢水田より清子

秀ひで

今即左衛門 生國同前

勝かつ

孫左衛門 生國同前

天正十九年

大指現より清子とそまうまは

在徳院殿より清子まうま

元和五年 上使やうと肥後のま

下甲被地よりおわく死と歳四十八

富とみ

孫左衛門 生國同前

実と秀ひでの子なり勝子なりゆ

養子やなり元和六年より

在徳院殿より

おぼろおぼろにほろろとまらふ

おぼろの  
三

うが

渡色

● 重綱

若菜

生田武苑

成田右馬助よりけりて後病死

重次

三五郎

生田河前

享長十七年

右内院殿より清くことまらる

元和九年つぎ初春つぎ助右衛門つぎと先考也

去々々

將軍家より清くことまらる

家紋  
蛇目じやうめ

渡邊

● 吉正

村瀬伊豆守 生國近江  
佐々木六角より侍

重次

村瀬伊豆守 生國同前

佐々木家より信子

吉成

林市景 生國河原

織田信孝より信子

定

渡邊長景 生國河原

本氏より村松なり志と進と渡邊

山城守と親頼より信子と渡邊

の氏と得くしめく渡邊と梅

其の長九年山城守と先容より

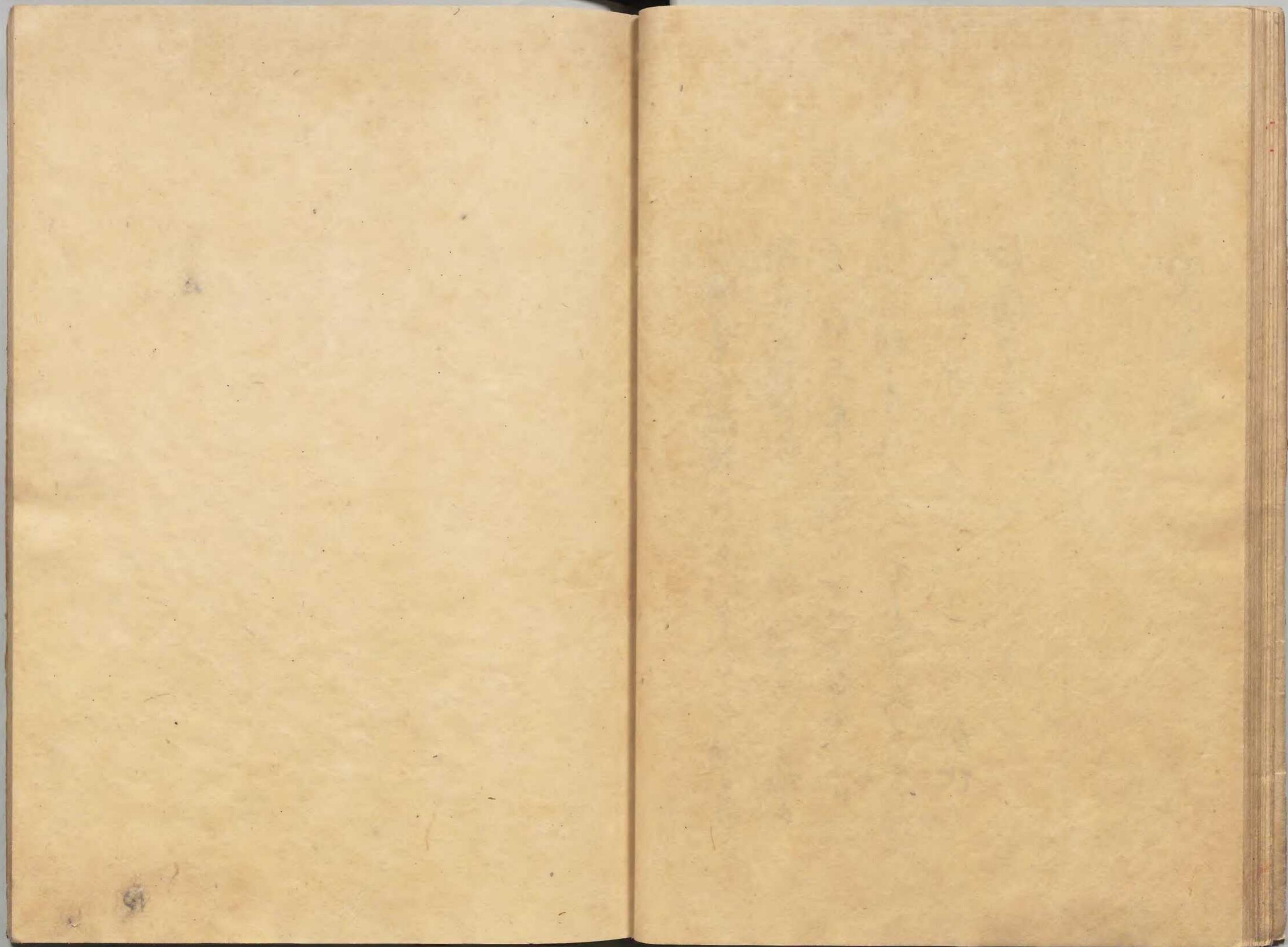
右徳院殿より信子と其より

將軍家より信子と其より領地を

とゆふ

家の段 裏錢七文





渡邊

●重しげ

与右衛門

生國近江しげ

元龜元年死

法名宗貞むねさだ

勝かつ

筑後守ちくごのり

生國河内

けしめを考たりつよ  
きち三子めふらるる

大権現よりけしめをまつる

同日年関ヶ原清陣の付 鉤命と

象り

右徳院殿より房せしむ

同日年没位下り叙せ

寛永三年六十六歳少く卒せ

法名あはれ

正

右右妻 生國 橋津

元和五年

右徳院殿より福あはれ力あはれよりそくまつる

寛永三年より没位下り叙せ

同九年

將軍家よりけしめをまつる

家の級書

渡邊

源朝天皇六代

網

田舎人別當 源二

実在に明正天皇四代の孫教の二男  
多田頼光の陪臣曰天王也号曰

久

安やす

源五位下よつご いかげ

源口史よつご ぐち

至いたる

源五位下よつご いかげ

源馬光よつご のりみつ

源七太夫よつご のりむすめ

好このむ

源中尉よつご ちゆうゐ

源よつご

源五郎よつご ごらう

辭ことば

源右郎よつご ぎゆうらう

高たかし

源八よつご ぱち

宗むね

源左郎よつご ざらう

實まこと

源三よつご さん

則すなはち

源五郎よつご ごらう

續つづ

源二郎よつご にらう

忠

多田の補くまのせ

光

源右衛門 後新馬

恒

源三隼人

知

源三郎

右京亮

某

武田たけだりし人甲斐かい後河ごがの境さかいに栖すまり  
居いる後河ごが場ば小田原せうでんげん甲斐かい別わかり登のぼり  
ののれれ教しゆ度ど忠ちゆう直ちゆうととししくくくく信のぶ直ちゆう  
乃すなはちち信のぶ又また教しゆ通とあり

た近ちか

兄あにの知ち也やおお形かたちくく武田たけだりし人  
教しゆ度ど我われ忠ちゆうををししくくくく信のぶ直ちゆうのの境さかい又また  
乃すなはちち

源二 たに 是後本桶より居て 法名浄金 どうごん  
武田信庸 たけだのぶひさ としひ信玄 のぶ よりしき  
富士人ま今我の ふじのひと とき城と守く  
我忠と わがただ しくと毛よりる け しく大弁 おほひん  
の頭 あたま ありし し 由りぬ 神文 かみづかひ の写 うつり ぬ

一指の黄文

しん 新関在東の村か

一貳貫文

ふじのくに 富士郡の村か  
井頭 いのかぶ

一叁指貫文

あさひ 長田中將か

合五指貫文

杉大 すぎの 大 おほ 在城 に ぬは 杉下 すぎの 並 なら ぬ 依我 よ  
切 き 下 した 被 ひ 宛 あて たり 清 きよ 手 て 思 おも しく 旨 あじ 被 ひ  
作 つく 出 で 多 おほ 也 なり の 件 けん

土屋右衛門尉在

元龜元年 げんき 庚申 こうしん 七月十日 朱印

海邊を



守

源五郎

囚獄

本栖り居

信吉とひ勝頼より信吉

と正五郎勝頼より父の位職を給り

徳文あり

同十年甲別没落のとき信吉乃

陪臣江尻と吉兼射守とにその位職を給り

信吉より信吉と送る

いふに其事ふ志こつと吉別没落

り

大権現より信吉をくまらふ

周年

大権現甲別没落のとき吉別没落

りよりくまらふの案内者と信吉

小先をくまらふ甲別没落のとき

大権現の没落せり本栖り居

甲斐守の境と守給る

命ありあまなりてはうり  
ゆらんやうと柏坂とてはうり  
本橋のあし脚ありあまなりてはうり  
原郷郡田入り礼入とてはうり  
村生丸村の一揆増起とてはうり  
り合り守と討とんと議と  
久保新十郎とてはうり  
久保現の忠告り達とてはうり  
作

いそに本橋り婦小田原郷あり  
一揆の輩と誅伐とてはうり  
且加坊やうとてはうり  
守と保一節や本橋りあり  
小田原郷とてはうり  
押込とてはうり  
守は頭ふれ着十二級とてはうり  
と十一級を得るありとてはうり

事多き人よとゆありんか木の事  
 大権現の白紙をなす一と我切と  
 好い申候あり此案候をいゆらば  
 同年七月山中在候の侍十七騎  
 同候二十一人附居せし候  
 御朱印此写し  
 甲斐路次往を為候國濟道因獄  
 其朱印を考へて別紙を寄一作ぬ  
 其朱印を考へて別紙を寄一作ぬ

大正十年  
 七月十二日  
 大権現  
 御朱印

濟道因獄依り  
 濟道二了集  
 同 今集  
 同 了集  
 同 了集  
 同 了集  
 同 了集

天正十三年

大権現より給ふ御朱印此写しおく

甲州心経寺より角四拾四貫百八十五文

日向寺丸寺人本村名田寺貫文

向山より一右巻分七貫文高家内

七拾貫文日向寺丸寺人駿州大

文より五十貫文小事

右如前々法授小不字有相遠者守計

有向後下好忍信高進の御件

田中兵部

日向寺丸寺

向山又ハ向

一瀬平三

大垣屋書

去橋大務

日向寺丸寺

酒色但馬

内藤孫十郎

日向寺丸寺

天正十三年酉七月廿日

大指現

御判紙

後意囚獄依との

同十一年小田原西陣のくじ旗なり  
ありく供在

同年

大指現関東沖入國の村或別におかて  
矢加費村ニ云村平井村と給ふなり

妻子と引く給地り居候也

同十九年奥州陣の村供在  
陣中おろしく病死

安

源秀

父守が志藏を継志り建とも幼少なり

少く力同心と辞す

長五年岡ヶ原清陣の村住

長

丸の陣の城をときとむ

命入りて甲府

乃をときとむけとむる本領を

とむりて甲府の城中にありて

病死十八歳

源五郎 白根

兄安の子なりて甲府の城をときとむ

享和十九年大坂沙洲の河成瀬

華人正とむりて信をときとむ

命ふりて甲府

居て甲斐路のさしひを堅固と

をとりて甲府の城をときとむ

率く沼津の城をときとむ

乃者とむりて

名徳院殿大坂沙洲をときとむ

おのりて甲府

城をときとむ

同二十年大坂陣の信を志り建た  
鉤命よりりて曾銅のつあ先立て  
本橋よりりつる  
大指現蕨御の境  
旨徳院殿より信之つをまつり 命  
よりりて忠長御の所と土井大炊  
頭利勝あまを信之つよりりて江戸  
よりりて土井大炊頭と同に  
本橋本橋とつはりて

と信林の修理亮までを書とつる  
と信酒造因幡依先規のつと甲斐  
駿河の境を守ふつと也なる  
寛永十一年 御上洛のつ忠長を  
江戸よりりて本橋口をのつと  
守りつと忠長事甲府に在る  
也お後とつと 忠長たり酒井  
雅樂頭あまをつと

盛もり

源げん丞のぶ 宇右衛門

寛永十二年十一月

將軍家入り 福ちか一いちつつままららふ

時とき

源げん守のり郎らう 市いち丞のぶ

某

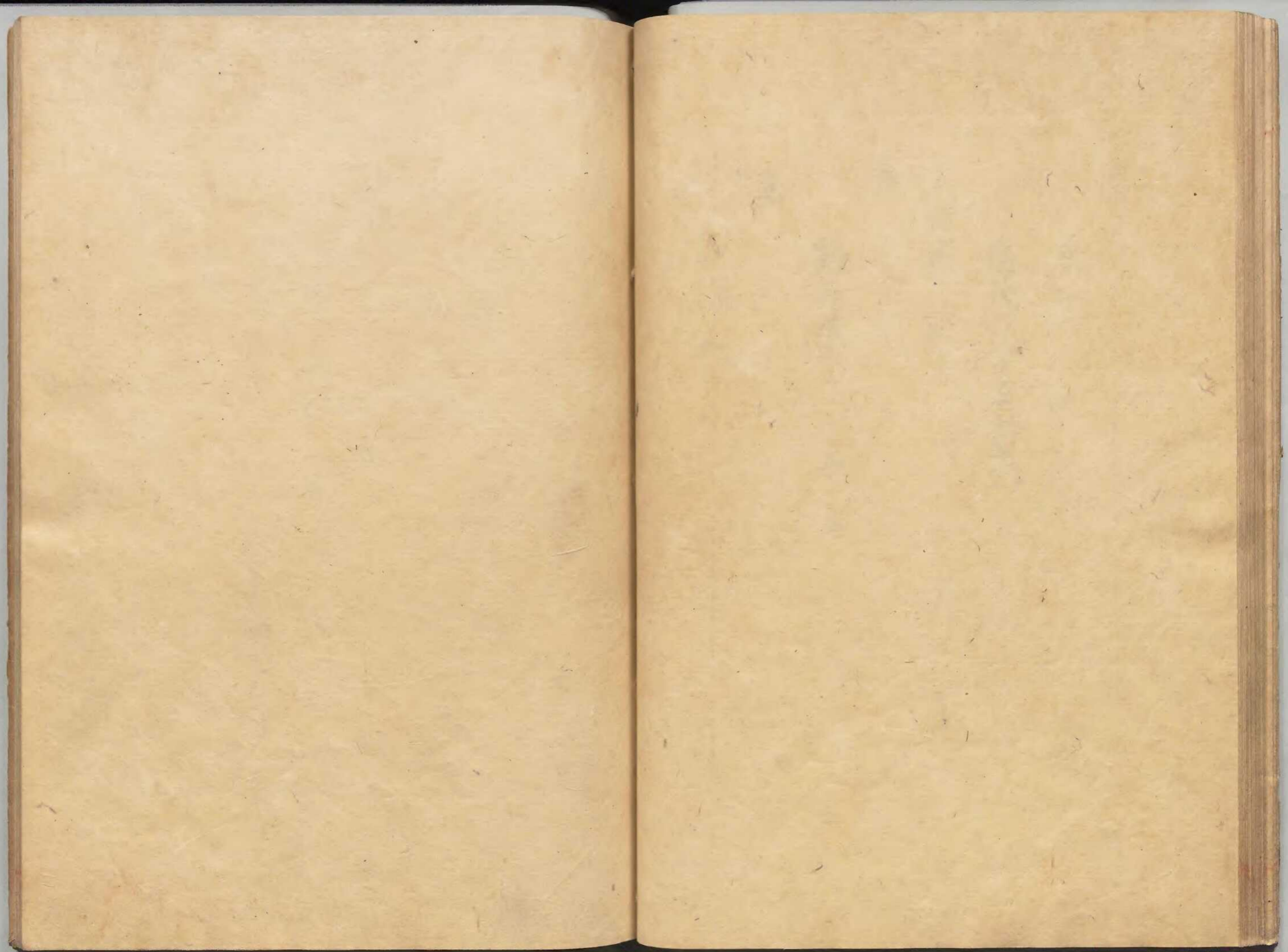
小源こげん右のぶ

友とも

源げん三のぶ郎らう

家の級 三さん痛いた拔はき





沼尾

沼尾

次郎 康村

生國

清原君

廣忠卿

正徳

次郎

玄蕃

生國

廣忠卿と云ふ

大権現よりほつてとまらる

真細

源茂 法事善勝針と改 生國司か

今川氏真よりと諱の字と受十歳

也記

大権現よりほつてとまらる始く二十

貫の地とほつて喜別とあ志づく中進

後の河内守 町におおく高名あり

大権現慶長一と云ふ

永禄三年尾別捕役間におおく今川

義元討死の節

大権現大なるより清海陣のときを記

也なりく信守一岳崎の城に入

同六年三別一向宗一揆のとき此

也なりく一属一植村在右殿と記

合と時より黒田三右衛門横合より

池向ひくれがまゝ三島島中鋒を令と  
け時一揆の銃士石川又十郎池じりひ  
左衛門と鋒と令とはやどかゝる迄  
のほ國をもちくね永弾西りは  
永別お多とせしむ射法入りしれ  
て先をのくもよるまゝく銃地と加増  
同一年三好松永義輝とるんごあ  
り大軍とらひく宮中とせめりこ  
じ射り城申よりよりあはれ武者

ら城向ひいりをあゝくせめり  
馬廻夫とぬくあまゝと射例 宮中  
の士卒あまゝり力なく志く川  
より義輝自害と家傳は及馬廻  
義輝と射とせしむ  
同一年松永が家とまゝく氏高は清  
同十一年幸別掛川あ宿りおあ  
切ありの年三月同下して味方殿水  
のよと馬廻あ合せく脇矢を射く

本多九郎の鑓をうらひしむる是の  
よりく氏志より感状とたまふ念に  
り

同十二年遠別掛川没落のころ

本多中務大輔より属長

元龜元年江別婦川合我の討去

細鑓を合ふ

人情現あまきと辨一婦の村奈川乃

り二張長去の鑓二十本と下賜

伝言三別をせめんやしくうのり討

甲別の急憲等内意のつあく

て鳳井寺よりあふりしと村云傳言

と聞りをりしれり此地のま

境通をらふありのりめ掃へま

者本多中務大輔より

つ希しれあまきりよりて本多

三浜三浦九吉澤久貝市右衛門尉福

尾中尾尉尉波色も吉兼おれり

才書右衛門等五六輩と云ふ  
涉前より一おこさおせり  
いゝかの無黨と云ふあやうふ  
おあゝくお忠良をば一  
謀りいんを討たるこやま  
去細送りの地りむひく  
忠黨と云ふあ捕らうた墨太  
あゝゝああ助にをた  
相具して帰る

同二年幸別三原一戦の  
去細言詰りあゝあゝあ  
甲首と云ふ  
同二年長藤合戦の  
切りりりり

大指現より二十費の地をくら  
同年小山の城をせあ  
本多中務大膳が郎後小野  
内山地系中村又集等  
人手

よちわかき 鐘を合とせり 志細  
鐘脇の歌と射敵敗水のつら久由のよ  
地系と折ゆ 敵城中より実お  
味もすくりに引返ん也とせり  
ごまに 松下源七郎一人  
と海りてうら死と去乃高た  
より歌地身く 小山秀之郎と追  
ひく小山とらまら入り何れく  
乃とるこころよ 志細と茶を

ひも夫とけふあまりりよりく  
秀之郎刀と得ぬ一命と敵志細よ  
向ひせめ我よ志細敵三人を射り敗  
そり内り味もあ合せあらけり  
同して我家りおわく敵防りり  
かくおとくく敷水と  
又後川田中とせめ海より城中  
うりあまを志つよけと記志細  
合せ夫を敵敵を返るを収く帰る

同十二年尾別長久手陣尾別長久手陣り  
侍

同十一年相別小田原陣相別小田原陣り  
志志

同年武別岩付の城武別岩付の城とせむる侍  
矢病二膝矢病二膝一と明くゆふ

同十九年奥別陣奥別陣り侍を  
河別埴川合戦河別埴川合戦より奥別陣奥別陣  
りり至至まで本多中務本多中務を陣陣り

同十二年  
事十二年  
居居ととままななののことことままくく之之別別居居

同長十九年大坂陣大坂陣の侍を  
居石見守の陣居石見守の陣中中りりよりより翌翌年年  
陣陣のの節節をを本本多多依依渡渡守守のの陣陣中中りり  
居と清河陣居と清河陣より伏見伏見より相相ああく  
りり小小野野りりて

名波院殿名波院殿より侍侍之之ことことままるる事事  
元和六年二月十二日武別武別江戸



しりあわく病死也一八十  
法名宗源

則綱

源義 後半宗系也改生國幸江  
本多中務大輔しは之く小田原若  
付奥州等此陣とほとむ  
まゝ本多義深守りつ之く志回  
仲とつとむ

勝綱

享長十五年又月十七日勝別業名  
しりあわく病死也一八十 法名宗源

い郎右衛門尉 生國同前

元和二年

右法院殿しりまみえをくまらふ

寛永七年

將軍家しはふまらり仲弓同心三十人

とあつた  
同八年布衣と恙とらる事とゆ  
う  
同九年騎馬口心五人を討つ

重真

節右衛門

生國三河

元和七年

台漣院殿より湯へてまう

寛永四年より始く勤仕  
習子大妻とほむ

幸綱

源茂

生國武彦

寛永十年

將軍ありまかえしとまう

同十五年より勤仕

行細ゆきこ

武吉澤尉

生國なつくに同どうお

年細としこ

七郎しちろう若澤

生國なつくに三河みかわ

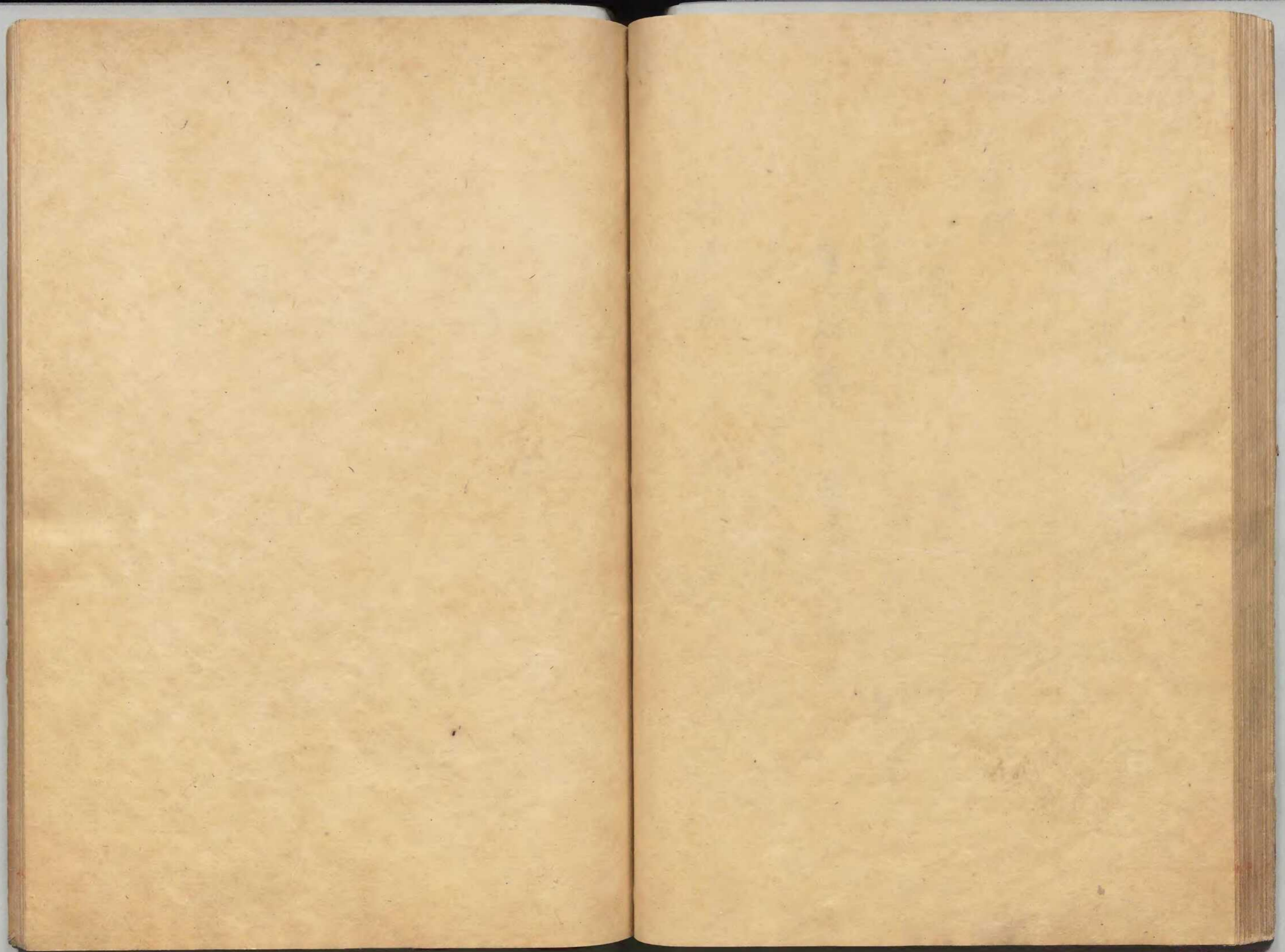
美石川みいしかわ中なかつ尾おつ子こなり則すなは細こ喜よろこぶ

子ことらありあり活い色いろと号ごう也なり

寛永十六年十月

將軍しやうぐん家けりりおお端はししくくててままつつる

家の級けい丸まるのの也なりとと号ごう



● 正名

渡邊

無名

生田伊賀

大指現よりつるまふり  
江戸よりあわ  
て病死

吉重 よししげ

甚七郎 生國くに武ぶ茂しげ

右注院殿みぎのしゆいん入いりりほほくくくくままつつるる

寛永元年かんえいげん廿九歳にじゅうきゅうさい少すくくく死しす

吉長 よしなが

兵衛べいゑ 生國くに同どうのの

実じつるる武ぶ茂しげ甚しげ又また若わか者もの吉勝よしかつの子こなり

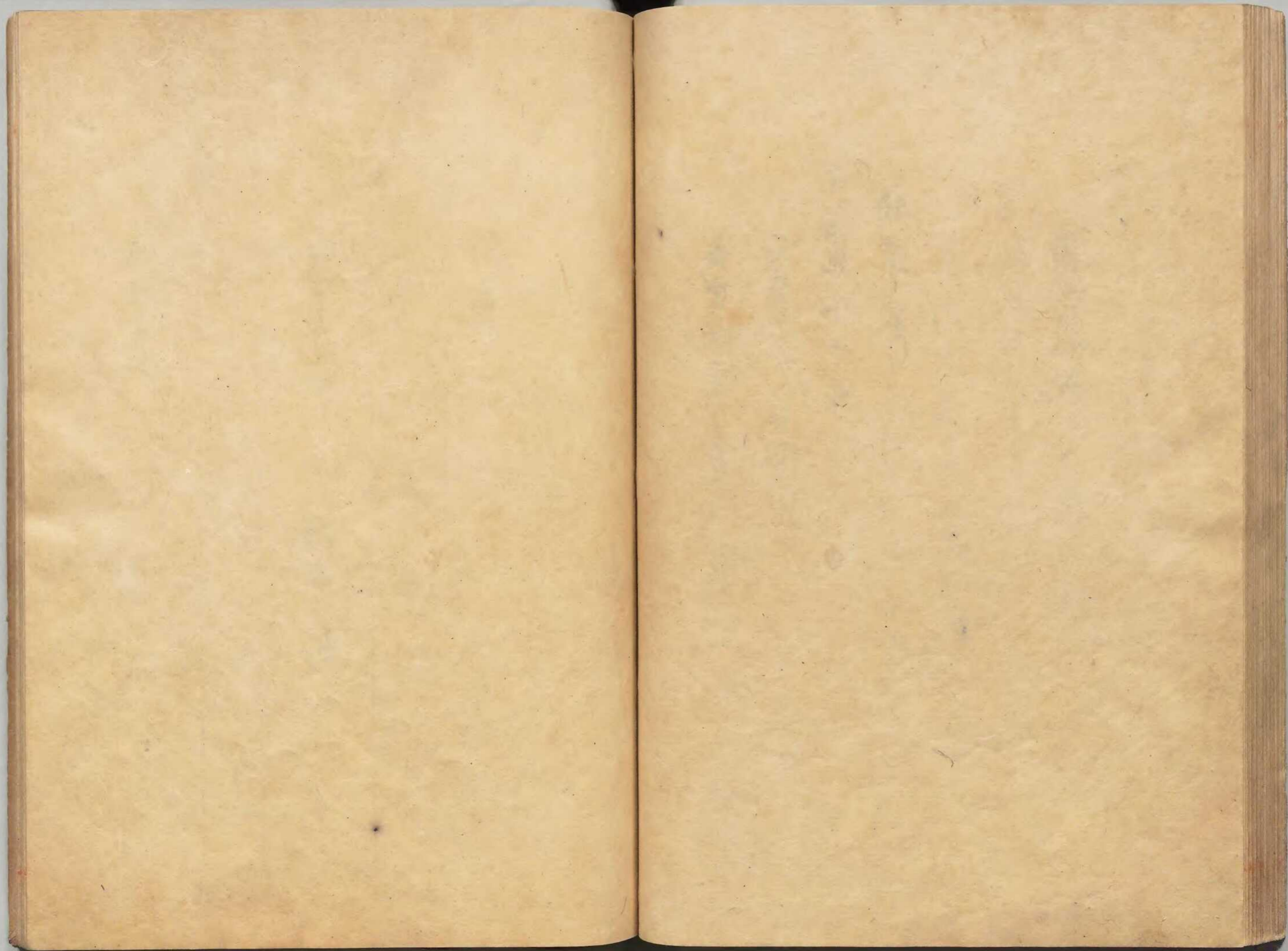
吉重よししげ嗣ついで子こなりなりふふののままははくくたたりりとと書かす

て子こなり

寛永十年かんえいじゅうねんより

將軍家しやうぐんけよりよりほほくくくくままつつるる

家の及まの及び死目しめ



長 なが

利部りべの補ほ

近 ちか

与よ之の集しゆ門もん尉ゑい

渡わた邊へ

志 し

利部りべの補ほ



某

源二郎 下野守 生國 栢津

栢別安倉乃城入り居らあり安

倉也袖也

室町ありはよ

法名 淨林

某

源二郎

主殿助

生國 同前同城

室町ありはよ

法名 宗林

清

与之長 生國 同前同城

義輝 義昭 ありはよ

室町家滅亡のは 潜り 安倉の比

り居ら

五心 年 信長 安倉の本 領を 終り

同十年六月十二日 討死 あり 四十七

法名宗作

定

与地 仁孝 生國岡

父初死のとき七歳なり流浪く

江別りりしり後山城入り居る

寛治十年二月四日病死歳三十一

法名宗金

勝

孫上郎 初仁孝 主殿 生國山城

母 東福門院の御乳母とありて

十八年より祥延し同十九年より

崇源院殿入り侍りてそのまゝに

名法院殿入り侍りてそのまゝに

のり

將軍家より居舎なりびり年福と

延和二年 延和二年

延和二年 延和二年

延和二年

延和二年

延和二年 延和二年

延和二年 延和二年

延和二年

延和二年 延和二年

延和二年 延和二年

延和二年

延和二年

延和二年

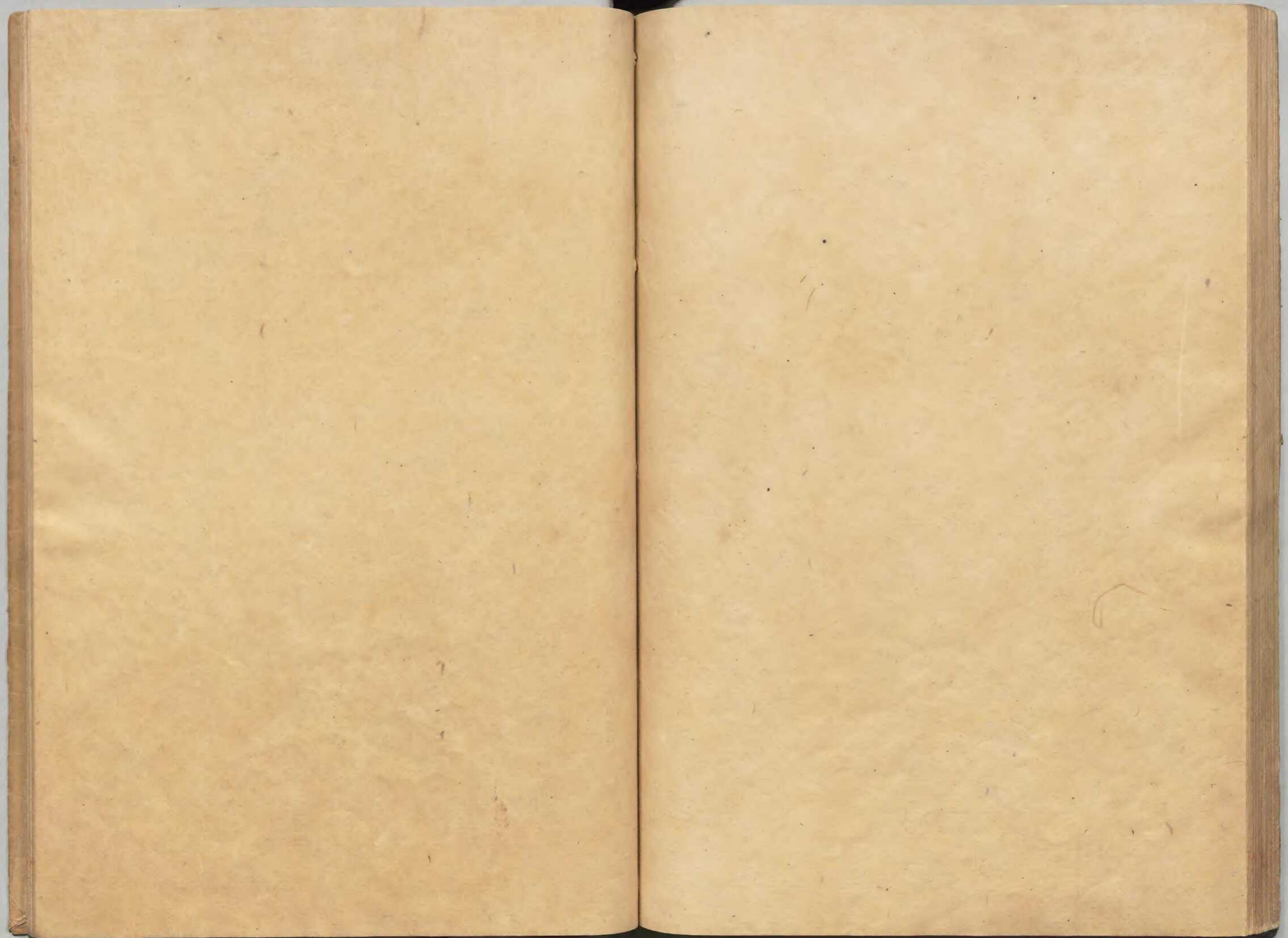
延和二年

延和二年

延和二年

延和二年

延和二年



● 盛吉

丹後守

生國甲斐

武田晴信乃家臣也

向山

本は渡邊と稱せしれよりのそ今渡邊

入り入

盛重

監物

生國回お

晴にりけく家臣やわら

長篠よりおわく討死衆二十五

正盛

二右衛門

生國回お

ま正十年のふりりて

大指現りけくそまつる

盛廣

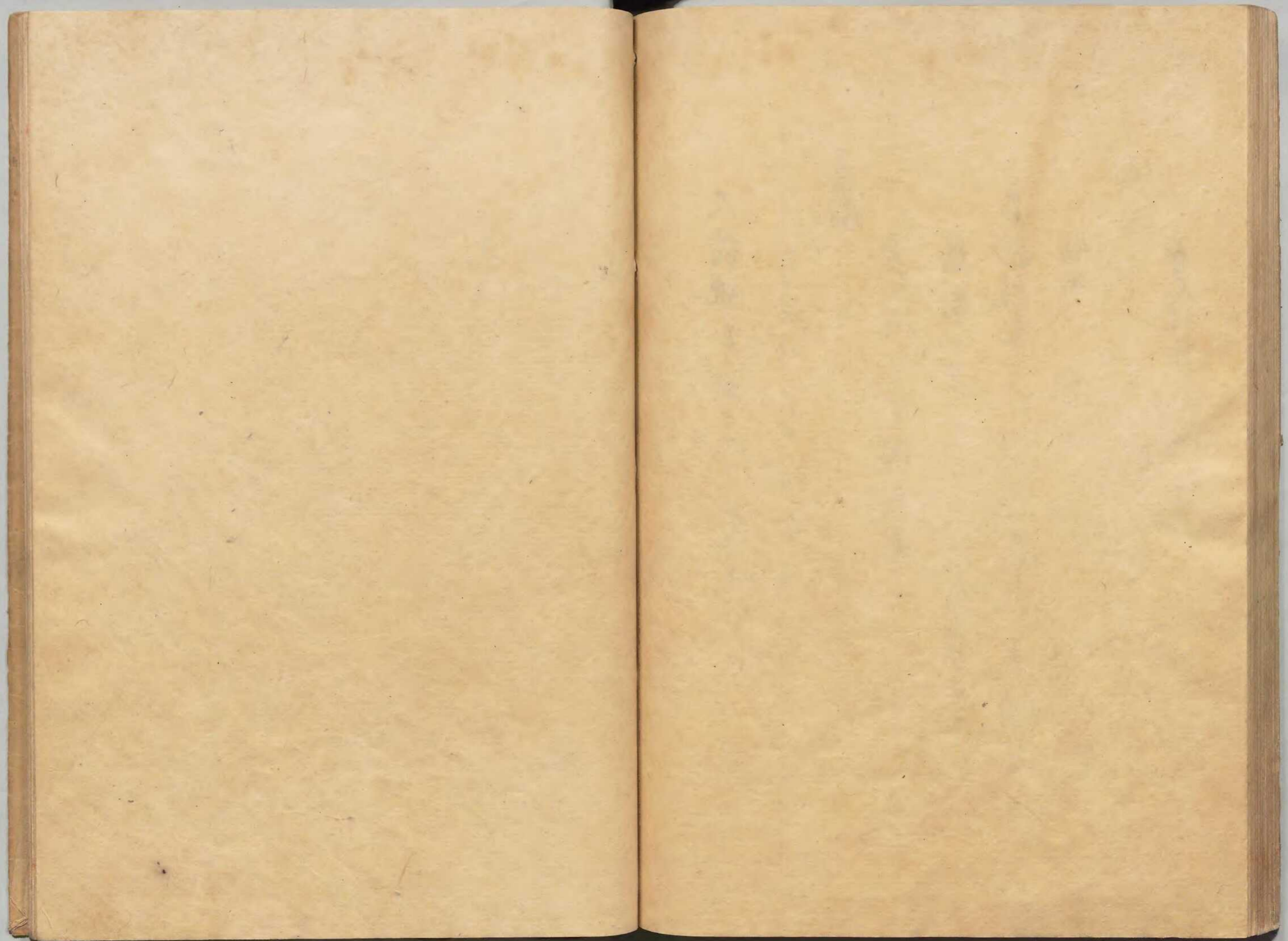
傳右衛門

生國武苑

寛永七年

名徳院殿りけくそまつる

家乃紋幕の紋提葉



● 重則しげのり

多門おほいど

平次郎へいじちやう

縫殿助ぬいどのすけ

生國三河なまのくにのみつ

三河安城みづのへやすきよりより若くわかくく百ひゃくのの三さんのの禮れい

信光のぶみつよりより信子のぶこよりより行ゆるるあまあまはは安城やすきにに

禮代れいぞうなりなり



重利

平次郎 隆政 生四回  
清康君より子まはる 法名  
浄甫

女子

内藤新左衛尉の妻  
大指現乃沖乳母なり

重信

平次郎 隆政 生四回  
廣忠卿より子まはる

大指現より子まはる  
元龜三年幸別三方原合戦の時  
人質と何れも演相乃城留守  
番とす

文禄元年四月七日死と七十二歳  
法名浄明

重正

平七郎

生國同前

大指現より長久しくそまらふ事

天正十二年長久自今我の事

我死に付り二十五歳

信清

平義

信右助

生國同前

大指現より

信清院殿より長久しくまらふ事

天正十二年長久自今我の事

大指現の御馬乃前におわく甲首三

級を授けり付り十九歳後迄は

信清院殿に在りて是れ也

於て長くいふ事我く又首二級を得

事

大指現より長久しくまらふ事

川の沖より始り今も是れ也

寛永五年 吉田御陣、侍をそれ  
より此の大島に組立をほむ  
日十八年 伏見の城番をつとむ  
日十九年 大坂御陣の時 伏見に在  
る徳院殿の御家よりけりし侍を  
侍をりし侍をりし侍をりし侍  
御子甚御陣より志すひたり  
同役をつとむ其に後行忠長御  
侍をりし侍

寛永六年二月十九日 死す六十八歳  
法名道薫

成正

平次郎 平兵衛 生國回前  
大権現より侍をりし侍をりし侍  
陣より侍をりし侍

寛永十五年十二月七日 死す  
歳四十二 法名大眼

正成 まさなり

甚有忠

信正 のぶまさ

平昔湯 生國三河 一本正信正信

至長十二年

信正院殿より信之とてまのふ

元和五年後江中島と信とて其後

忠長郷より信ふ

寛永十年より信之とてまのふ

將軍家より信之とてまのふ

正名 まさなり

勘定 生國武彦

寛永十二年より

將軍家より信之とてまのふ

正勝まさかつ

平次郎

生國同前

大指現入り法之了そまづり御小姓こせうの

別まはり入りくつりぬ

大坂冬夏おおさかふゆなつあふ御陣ごじんに法はふをのら

台法院殿たいはふいんとす

御家入り法之了そまづり

寛永六年かんえい六年道みちをよりとり

正友まさとも

甚慮

將軍しやうぐん家入り法之了そまづり

正永まさなが

棺かた墓ぼ

御家入り法之了そまづり

正清まさひら

平之丞

生國同前

信利

傳節

生國同前

寛永元年

將軍家より福見くそくまらる

同十四年大番と法もむ

同年小番清なりと好る

同十九年四月十一日歩兵の以と好

清董

平茂

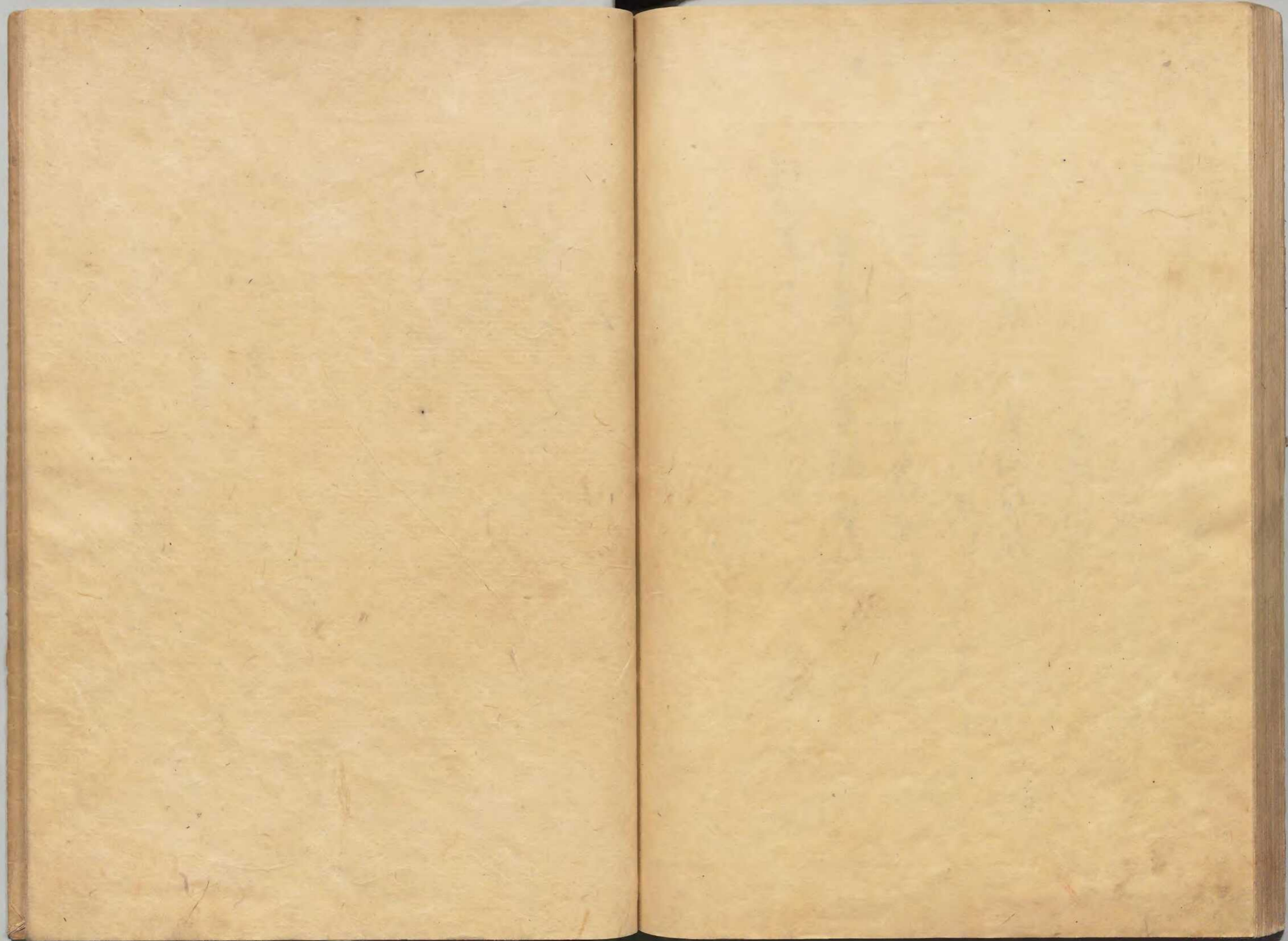
生國同前

利正

七之助

生國同前

家乃及創酸抄水卓



● 重作

河内源氏

大槩

文徳天皇此末孫坂戸の流なり

大昔事射

大永五年河内國入り生

河内

志紀郡阪別を領す

天文年中二好家入り角と屋



我<sup>え</sup>の<sup>こころ</sup>あり

河<sup>か</sup>内<sup>うち</sup>神<sup>かみ</sup>郡<sup>ぐん</sup>二十<sup>にじゅう</sup>山<sup>さん</sup>今<sup>いま</sup>我<sup>われ</sup>の<sup>こころ</sup>に<sup>あ</sup>る<sup>まじ</sup>重<sup>しげ</sup>治<sup>ち</sup>

鬼<sup>おに</sup>鷲<sup>じゆ</sup>冠<sup>かん</sup>助<sup>すけ</sup>也<sup>なり</sup>挑<sup>ひき</sup>我<sup>われ</sup>の<sup>こころ</sup>に<sup>あ</sup>る<sup>まじ</sup>逆<sup>さか</sup>に<sup>あ</sup>る<sup>まじ</sup>

赤<sup>あか</sup>毛<sup>け</sup>と<sup>と</sup>討<sup>う</sup>つ<sup>ま</sup>紅<sup>べに</sup>毛<sup>け</sup>より<sup>も</sup>も<sup>も</sup>地<sup>ち</sup>と<sup>と</sup>鷲<sup>じゆ</sup>冠<sup>かん</sup>原<sup>はら</sup>

也<sup>なり</sup>昔<sup>むかし</sup>の<sup>こころ</sup>國<sup>くに</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>を</sup>許<sup>ゆる</sup>す<sup>まじ</sup>鬼<sup>おに</sup>人<sup>ひと</sup>様<sup>さま</sup>

と<sup>と</sup>秘<sup>ひ</sup>せ

永<sup>とこ</sup>祿<sup>ろく</sup>九<sup>く</sup>年<sup>ねん</sup>和<sup>わ</sup>州<sup>しゅう</sup>多<sup>た</sup>門<sup>もん</sup>の<sup>こころ</sup>城<sup>しろ</sup>今<sup>いま</sup>我<sup>われ</sup>乃<sup>なり</sup>

と<sup>と</sup>奇<sup>き</sup>山<sup>さん</sup>城<sup>しろ</sup>の<sup>こころ</sup>任<sup>にん</sup>人<sup>ひと</sup>佐<sup>さ</sup>賀<sup>か</sup>中<sup>ちゆう</sup>氏<sup>し</sup>の<sup>こころ</sup>時<sup>とき</sup>雨<sup>あめ</sup>の

矢<sup>や</sup>り<sup>り</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>無<sup>な</sup>し<sup>し</sup>陣<sup>じん</sup>の<sup>こころ</sup>後<sup>あと</sup>矢<sup>や</sup>射<sup>や</sup>と<sup>と</sup>ん<sup>ん</sup>

と<sup>と</sup>夫<sup>おと</sup>と<sup>と</sup>の<sup>こころ</sup>一<sup>いち</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>逆<sup>さか</sup>に<sup>あ</sup>る<sup>まじ</sup>也<sup>なり</sup>

四<sup>よ</sup>十<sup>じゅう</sup>二<sup>に</sup>歳<sup>さい</sup> 注<sup>しゆ</sup>名<sup>めい</sup>宗<sup>そう</sup>明<sup>めい</sup>

重<sup>しげ</sup>治<sup>ち</sup>

和<sup>わ</sup>州<sup>しゅう</sup>多<sup>た</sup>門<sup>もん</sup>

弘<sup>こう</sup>治<sup>ち</sup>の<sup>こころ</sup>年<sup>ねん</sup>河<sup>か</sup>内<sup>うち</sup>神<sup>かみ</sup>郡<sup>ぐん</sup>に<sup>あ</sup>る<sup>まじ</sup>

永<sup>とこ</sup>祿<sup>ろく</sup>十<sup>じゅう</sup>年<sup>ねん</sup>を<sup>を</sup>治<sup>ち</sup>す<sup>まじ</sup>十<sup>じゅう</sup>三<sup>さん</sup>歳<sup>さい</sup>に<sup>あ</sup>る<sup>まじ</sup>

神<sup>かみ</sup>く<sup>く</sup>戦<sup>せん</sup>場<sup>ば</sup>に<sup>あ</sup>る<sup>まじ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>織<sup>おり</sup>田<sup>でん</sup>信<sup>しん</sup>長<sup>ちやう</sup>

持<sup>も</sup>別<sup>べつ</sup>野<sup>の</sup>田<sup>でん</sup>福<sup>ふく</sup>徳<sup>とく</sup>の<sup>こころ</sup>城<sup>しろ</sup>を<sup>を</sup>治<sup>ち</sup>す<sup>まじ</sup>重<sup>しげ</sup>治<sup>ち</sup>

幼弱なりやとやも家には善く補翼  
 せしむるに我の先登一を名を召  
 せしむるに我の先登一を名を召  
 三好家没落のほ三好棟吉即秀次  
 属長  
 正十二年尾刈長久之手合戦の時  
 討死 歳三十

重保

重名勝代 長尾村 生田回  
 父重受討死の時秀次三歳なり伯母  
 入り養育せし後折別平野入り伯母  
 九条のち秀次尋ね求らるるに  
 て京都入りしむる父の舊友後瀬  
 長尾作左衛門守大右衛門守り由  
 みるありし事と秀次入りし事  
 秀次の曰重保少年此間三人の技  
 助と重保と重保と重保と重保と

庵とありけしけり十一歳のとき  
南禅寺に入り登心心園作乃門は格  
三年十四歳の時秀須自殺後濃白江に  
まゝ自殺し大山に教をせし家  
おひく浪人となり九別等此取と  
経歴とまは折別大坂入りありり相  
市正より居るは事五多あり  
秀頼の右巻とありり二十七歳  
享長十九年大坂陣の時人皆市正

謀叛とて謂ふよりて市正を宅  
小指秀才主膳正とて昌山民部左衛門  
毛利共棟矢野十郎為村あ川八右衛門  
永井助十郎伊东祐兵衛村重保  
志みあふとまゝくあまは意とまは  
市正逆心なきゆへに保人言難と  
かまはりく大坂とあり

東照大指現

旨徳院殿大坂入り秀向せんや一婦人

時市正ときいちのまことともび日勝正ひかつのまこと 治しよりして  
備前びぜんの陣じんよりして海重保うみしげたけとある  
り志しとびひゆく

元和げんわ元年大坂落城おさからくじょうの後のちに相市正あいにちのまこと  
才さい日勝正ひかつのまこと無留むりゅうの毛利もうり夫野つまの西川さいがわ永井ながい  
伊东いとう等ら本地ほんちを相領あいにりやうと重保しげたけと備前びぜん  
のそとよりとびゆく病びやうをひきめり勢せい  
とありと列りやうりあつて

同二年重保しげたけ江戸えどより去さる同二年二月十

ちり

名護院なごいん殿との増まと寺てらり 海御うみごの町まち重保しげたけ其

道みち病びやうりあわくあわくとと並ならり新我しんがをを持もて  
大坂おさかの事こととと去さるる河部かべ中なかも  
あまををとと同どうりりををとと去さるるこれを  
海うみのの派はととめりりとと去さるる右みぎ免めんとと好このむ

同九年

相市あいにち家いえ許もと入いり治しののとと此こゝ 作つくりりよりして  
重保しげたけををとと去さるるより勤こゝろけりり

寛永十年病やまいりより早く御ご右みぎ麓もとの  
役やくを以もつりて是こゝに御ご前まへ侍しやうと 御ご命いのち

より利き發はつして勢いきほひを以もつりて

同十一年沙さ入い洛らくの侍しやう式しき部ぶ御ご下したり

叙しよせり是こゝに是こゝより上かみに上かみりて

子こ重しげ政まさり讓ゆかりりありて

武ぶ列りつ牛うし込こ御ご三十餘さんじゆ所ところを

子こ海うみより

將軍家志しやうぐんかこころごとく高たか田で村むらと一いっ比ひ牛うし込こ御ごの

別わか墅しより 沼ぬま所ところありて  
乃すなはち下したりて是こゝにあり

重しげ政まさ

童わらわ名な小こ三さん郎らう 清きよ長なが集あつ村むらり改あらたじ

生なま國くに山やま城しろ

寛かん永えい四し年ねんより

將軍家志しやうぐんかこころとありて是こゝより

十じふ歳さい

日ハ年 沖右衛門 忠光  
日十一年 命と義り父の儀を  
受五石と給と

重信しげのぶ

左衛門

生國回前

某

宮内くわい

生國武苑じこくぶゑん

女子

振ふる

生國回前

某

山やま之の節ふし

生國武苑じこくぶゑん

女子

龜かめ

生國回前

家の級ごう狀じやう内うち並なら相あひ

